

他者の「記憶」と向き合う場

—目取真俊「水滴」を高校の教室で読む—

柳井 貴士

YANAI Takashi

1. はじめに

高等学校での担当授業の中で、沖縄の作家、目取真俊の作品を扱ってきた。そこで本論では教室（3年生）という場で沖縄の文学を読むことについて考察したい。

目取真俊「水滴」^(注1)は「第27回九州芸術祭文学賞」を受賞し、『文學界』1997年4月号に掲載され、第117回の「芥川賞」^(注2)を受けた。

「水滴」は、視点人物徳正の右足の変異について語られた作品である。「六月の半ば、空梅雨の暑い日差しを避けて、裏座敷の簡易ベッドで昼寝をしている時」、「右足に熱っぽさを覚えて目が覚めますと、「膝から下が腿より太く寸胴に膨れてい」た。「パチーンという小気味よい音が響くと同時に、膨らんだ足の親指の先が小さく破れて、勢いよく水が噴き出した」。その滴る水を沖縄戦で犠牲になった兵隊が夜毎に飲みに来て来る。「一人残らず深い傷を負っていて、立っているのがやっとな」というようなつらそうな様子や、ていねいに頭を下げて消えて行く姿を見ているうちに、徳正は哀れみさえ覚えるようになる中、友人であった石嶺を見つける。戦時下の緊迫した状況の中、同郷のセツから渡された石嶺への水を徳正は飲み干してしまった。戦後の五十余年を、徳正がその「記憶」といかに向き合い生きてきたのかを問うことが本作の課題となるだろう。

本作を読むことの目的のひとつは、戦争を題材にしながら登場人物の背景に注目して議論できると考えられるからである。文学作品の登場人物と向き合うことで他者の内奥の痕跡に触れられる。先に言えば、教室では登場人物徳正の「記憶」について議論、考察が重ねられ、戦争から生き残った人間の表層的明さと内奥の捉えがたい苦痛の亀裂に思いをよせることができた。本作を読むことは、沖縄の多様な文化とともに、沖縄戦を通して生き残った者の抱える「記憶」と発露、それをめぐる生者の懊悩に触れる機会となるだろう。「読む」行為を通して、テキストに向き合いながら多様な議論を展開できるのが「水滴」の魅力である。

さて、「水滴」の教材化については幸田国広^(注3)がすでに試みており、授業への導入と実際の現場の反応を「死者の闇／生者の闇」、「水滴——いのちの水」というテ

ーマに分け報告している。幸田は「水滴」について、「第一に、沖縄戦を描きながらも「戦争の記憶」にとどまらず、むしろ人間の魂の次元での普遍的問題が提起されており、鏡の反射のように一人の男の内面から逆に沖縄戦が照射され」、「第二に、複数の視点から人物の内面が照らし出されそれらが相互に絡み合いながら展開しており、読み手の中に葛藤を起こさせ既存の価値観やコード解釈による理解を揺さぶる可能性を持って」おり、「第三に、ウチナンチューの作者による沖縄をめぐる情勢の今日的課題に対する問題意識が根底にある」と述べている。「戦後五十余年」の経過をふまえ、「戦争体験を語り継ぐ」ことの重要性に呼応することが幸田の目的でもあった。

教室において小説を「読む」中で、ひとつの指標とされるのが「第三項」論であった。山中正樹は「第三項」論に関して以下のように述べる^(注4)。

つまり私たち〈主体〉が捉えていると考えていた〈客体〉は、じつは〈客体〉の実像（〈客体そのもの〉）とは異なるものである。それは〈客体そのもの〉が私たち〈主体〉の内部に結んでいる〈客体（そのもの）の影〉なのである。このように、世界を〈主体〉と〈客体〉の二項で捉えるのではなく、〈主体〉と〈客体（そのもの）の影〉と〈客体そのもの〉の三項で捉える。それが第三項論である。

またこの理論において重視されているのは一回性の現象としての「還元不可能な複数性」であり、「了解不能の他者」である。田中実は以下のように論じている^(注5)。

わたしは自分の捉える対象を〈わたしのなかの他者〉、その外部を了解不能の《他者》と呼んできた。捉えられるのは了解不能の《他者》をまえにした時の、その手前、〈わたしのなかの他者〉でしかなく、これを対象化して捉えようとしているのである。

「水滴」における徳正が抱えた「記憶」は、水滴という了解不能の怪異の源泉であり、戦後の長い時間を生きた人物の開くことができなかつた物語であった。その膨大な時間と、未発の言葉に向き合うことが「水滴」の教材化の試みのひとつであった。

授業では個々人の読後の感想とメモ書きをもとに数名のグループを作り、テキストと向き合うことを軸に、課

題となる議論を見つけていった。各グループで練り上げた意見や感想を発表し、その場でさらなる意見や疑問の交換を行っていった。以下、グループごとの発表と個人の感想をみてみたい。

2. 「水滴」といかに向き合うか

幸田の報告にある「戦争の悲惨さをいいたかったのだろう」という画一的な感想が、本授業でも多くみられた。それは「戦争は行なうべきではない」(A・S^(注6))、「戦争はたくさんの悲劇と苦しみを生み出す」(H・M)、「戦争を行わなかった日本の戦後は特筆すべき」(E・M)だというものだ。教条的に、内容を問うことなく繰り返される言葉には意味が見出せない。他にみられた「憲法は見直すべき」(M・Y)という意見と、「戦争は行なうべきでない」の間を埋めるための具体的なイメージは抜け落ちている。悲劇や苦しみがいかなるかたちで、作品の読み手である生徒に到来するかは、テキストのいかなる言葉に立ち止まるかによるのである。ここでは三点に問題を限定して報告していく。

2.1 「戦争」

テキストには「徳正の右足が突然膨れ出したのは、六月の半ば」とある。広島と長崎の原爆投下、終戦の日を知る生徒も沖縄戦が終結した公的な日付「六月二三日」には知識が及ばなかった。あるグループが疑問を持ち調べたように、牛島軍司令官が摩文仁にある軍司令壕で自害をした日が六月二三日であった^(注7)。沖縄戦が終結に向かいながら、住民を巻きこんだ多大な犠牲に直面していることが八班ある中の三つのグループにより発表された。〈ここ・中心〉という固定的な概念では理解できない存在があることに目を向ける記述として「六月半ば」は機能している。

沖縄戦についての描写に注目しながら、徳正が抱えた「記憶」について意見が交わされた。「村から二人だけ百里の師範学校に進み、鉄血勤皇隊員として行動を共にした石嶺が、別れた時のままの姿で立っていた」という箇所注目し、師範学校に進学した徳正が、村落におけるエリートであること、それなのに戦後に決して豊かな生活ができなかったことへの同情が挙げられた。

2.2 「水」

徳正の足から流れる水滴について意見が出された。

徳正は沖縄戦の「記憶」を語れない。夜、現われる「兵隊達」についてテキストでは「とっくに気づいていながら認めまいとしてきたことが、はっきりとした形を取って意識に上ってくる。／兵隊たちは、あの夜、壕に残された者達だった」と記される。その中で友人の石嶺に出会う。徳正が石嶺との間に抱えた「記憶」とは何か。

あふれた水が頬を伝わるのを目にした瞬間、徳正は我慢できなくなって、水筒に口をつけ、むさぼるように水を飲んだ。息をついた時、水筒は空になっていた。水の粒子がガラスの粉末のように痛みを与えながら全身に広がっていく。徳正はひざまずいて、横たわる石嶺の姿を眺めた。闇と泥水がゆっくりと浸透し、もう起こすこともできないほど重くなったように見える。壕の中の声が聞こえなくなっていた。空の水筒を腰のあたりに置いた(40頁)。

テキストに記された「水」は、「ガラスの粉末のように痛みを与え」るものであった。「戦争中に、仲間から奪った水で生きぬいた徳正が、水の反撃を受けた」(K・A)、「水は徳正の罪悪感に通じていると思った」(A・S)という意見があり、また水の持つ二つのイメージについて指摘したものもあった。徳正の従兄弟清裕は「水」がもたらす生命的側面に着目し、瓶詰めにして村人に高値で売る。徳正の足から滴る「水」は毛生えや若さをもたらすものでもある^(注8)。

- ・ 水は幽霊を癒す役割と同時に、生きている人間に効果をもたらしている。だが、幽霊が癒されたとき、人々への効果がきれてしまい、清裕がボコボコにされるのが面白い。(Y・E)
- ・ 水は命を象徴していると思う。死者の渴きをうるおすことで徳正が救われている。(R・K)

「水」が単なる癒しとして機能しているわけでないことを解釈し、「水」が何に起因して滴るようになったのかを考えることが重要であることは言うまでもない。「徳正の異変は何が原因か分からなかった。だが、その異変が幽霊や石嶺を呼びこんだことは分かった。私たちは幽霊はいないと考えた。だから幽霊は徳正が生み出したものだと思う。でも、それを生み出した水はどこから来たのか分からなかった」(グループC)という意見に対して、「水はガラスの粉末のような痛みを、ずっと徳正に与え続けていたのではないか。その痛みが徳正のなかで破裂してしまった。水の流れだす原因は、戦争中に石嶺からうばったところにあると考えた」(グループE)という意見が交換された。また、「水」について考えることで亡霊の存在が浮上してきた。

2.3 「兵隊達」——「記憶」という問題

次に三点目、「兵隊達」についてみていく。徳正の水滴を飲みに来る者たちは何者なのだろうか。大きな疑問であり、意見が交換されたのはこの点であった。「戦争で見殺しにしてしまった仲間たちを、五十年の時間を経て癒すことができた」(M・A)、「亡霊は徳正の罪悪感が生み出したものなのではないか」(A・H)、「子供たちに語る徳正の戦争の話には嘘があって、そのことが亡霊をよびよせたのではないか」(T・I)という意見が交わされた。

この「兵隊達」・亡霊は、徳正において自ら体験した戦争に向き合わせる存在となる。身体に重傷を負い、欠損の激しい「兵隊達」は死者でありながら、動的な生の場に召喚される。だがその生の場は、先の「水」とは違い、徳正にしか感知されない場である。

- ・ 徳正は戦争中に、セツから渡された水を飲んでしまった。石嶺へ渡してほしかったというセツの思いを踏みにじってしまったことが罪悪感として残っていて、それが幽霊をよびよせたと思った。(A・K)
- ・ 徳正は戦争の体験を子供たちに話す機会をもって、そこでは大袈裟に調子に乗った話として語っている。妻のウシが「戦場の哀れで儲け事しようと罰被るよ」と言っていたことが、徳正の異変としてあらわれたのだ。(H・M)
- ・ 自分が体験したことを正直に話すことはとても困難なことだ。思い出しながら語ることで、昔の出来事が生々しくフラッシュバックされるからだ。だから徳正はありのままを話すことができなかったのではないか。そして、話せない理由には友達を見捨ててしまったという苦しい思いがあると思う。見捨ててしまった石嶺があらわれて水を飲むことで、許してもらえたのだと思った。(グループD)
- ・ 徳正じいさんが話したことは、聞く人たちが求めていた内容と一致していたのではないか。だからお話は人気があり、お礼のお金までもらえた。だけどウソを話している罪悪感があり、幽霊による罰をうけたのだと考えた。(グループE)

教室では【徳正が戦争体験について話す】→【内容には脚色された部分がある】→【罪悪感として蓄積される】→【幽霊（兵隊達）の罰を受ける】というやや単純化された構造（読み）が提示された。一方、徳正が抱えた「記憶」を重視する個人、グループもある。

- ・ 石嶺やセツを裏切った思い出は語られなかった。戦争が終わってからずっと内緒にしていた思い出があふれだしたのだと思った。(R・S)
- ・ 私たちは「なぜ自分がこんな目に合わなければならないのか。徳正は日に何十回もそう嘆いたが、理由を考えようとはしなかった。いったん考え始めれば、この五十年余の間に胸の奥に溜まったものが、とめどもなく溢れ出すような気がして恐ろしかった」というところに注目しました。本当は理由は分かっているから、考えないようにしたのだと思います。仲間を裏切ったという徳正の記憶こそがこの物語のカギになっていると考えました。(グループA)
- ・ 本当のことは語るができない。徳正はウソを言うのではなく本当のことを隠していることで苦しい思いをしていたと思う。それは生きていくうえで仕方がないことだ。だけど、徳正はその苦しみに押

しつぶされてしまった。それが幽霊が水を飲みに来たということだと思った。徳正だけが持っている記憶は他の登場人物には伝わらず、徳正だけが幽霊をとおして、記憶と向き合った物語なのだと考えた。

(グループF)

徳正の「記憶」がテキストに語られる。読み手はそれを物語として知ることができた。「この五十年余の間に胸の奥に溜まったもの」が噴出することを回避するために、徳正は「記憶」から目を逸らしてきた。その「記憶」を象徴する存在の石嶺が水滴を飲みに来ることで、徳正は「記憶」と対峙することになる。その対峙とは徳正だけの内的で、ウシや清裕には不可視なものであり、その小さな亀裂は戦争という個人にとって不可避な事象から生成された。

新城郁夫は徳正が「兵隊達」と向き合う場面について「死者との交流と言えども夢物語のようだが、徳正は常に鋭く覚めた意識の中で事の推移を見つめている。眠りから覚めるという行為の反復を通じて、幽鬼たちと直接触れ合うのであって、官能的ですらある皮膚感覚が、非現実的なストーリーの展開に〈いま・ここ〉という現場性を与えている」と指摘する^(注9)。徳正が抱えた「記憶」は彼の住む共同体や妻のウシとも共有されるものではない。徳正は金城という若い教師の要請に従い、聞き手に呼応するかたちの話型を身につけることになる。語り得ない、語ることが忌避された「記憶」は担保されたまま、徳正は語りの場に連れ出され、語り得る体験を脚色しながら語るのである。石嶺の「記憶」は触れえないものであるが、その「記憶」との距離は徳正の内部で様々な変化しただろう。それが徳正の戦後の言葉にしえない五十年余という膨大な時間であった。

3. 了解不能の他者と出会う

「今度は兵隊達の渴きをいやすことが唯一の罪滅ぼしのような気がして、親指を吸われることに喜びさえ覚えた。しかし、今は疎ましくてならなかった」(28頁)。この点に注目し、日常性に還元される痛みについて指摘したグループがあった。彼らは戦後に徳正が生きた時間が、「記憶」に起因した痛みをかかえることと同時に、それを拡散し無化しなければ生きること自体が困難だったと指摘した。「徳正が忘れようと思えば、それでも毎日を生きて忘れているような記憶が、「五十年の哀れ」だと考えた」(グループB)という意見は、「教室」でも共感された。

水筒と乾パンを渡し、自分の肩に手を置いたセツの顔が浮かんだ。悲しみとそれ以上の怒りが湧いてきて、セツを死に追いやった連中を打ち殺したかった。同時に、自分の中に、これで石嶺のことを知る者はいない、という安堵の気持ちがあるのを認めずには

おれなかった。(43頁)

ベッドに寝たまま、五十年余ごまかしてきた記憶と死ぬまで向かい合い続けねばならないことが恐かった。／「イシミネよ、赦してとらせ……」(43頁)唇が離れた。人差し指で軽く口を拭い、立ち上がった石嶺は、十七歳のままだった。正面から見つめる睫の長い目にも、肉の薄い頬にも、朱色の唇にも微笑みが浮かんでいる。ふいに怒りが湧いた。／「この五十年の哀れ、お前が分かるか」(44頁)

この点は多くのグループが着目した箇所であった。徳正の気持ちの変化は、【記憶をごまかして語ることへの罪悪感】→【石嶺への謝罪】→【石嶺の若さへの怒り／「五十年の哀れ」】と理解されたが、自らの老いに抵抗できない徳正と、若さを保ったまま目の前に現われた死者の石嶺との間の断絶を読むことは重要であった。

テキストでは会話文が、「ええ、おじい、時間ど。^う起き^{そーり あつき}み^{く ひさ めー}候れ」「呆気さみよう！此の足や何やが」などと表記されている。一方で、石嶺が発した言葉は「ありがとう。やっと渴きがとれたよ」という「きれいな標準語」だった。沖縄における標準語の問題は、所謂琉球処分後の沖縄学務課編纂『沖縄対話』などの標準語教本を用いた「教育」の問題と関わる。軍隊での標準語を話す死者の石嶺は、時間の経過が剥奪された存在である。その石嶺を呼び寄せたのは他ならない徳正の「記憶」に関連した複層的な感情だったはずだ。徳正の「記憶」や戦後の時間を反映した幾層もの思いが、「兵隊達」、とりわけ石嶺に反映されているだろう。だとしたら石嶺が存在することをゆるすのも、また消し去るのも徳正の内的な問題なのかもしれない。「五十年の哀れ」に象徴される徳正の思いは簡単に了解できるものではなく、その向こう側には広大な時間がある。「水滴」は語ることが困難な出来事を扱う現在形の物語なのである。そして了解不能の他者と出会い、考える場として「水滴」テキストは読まれた。

教室で「水滴」を読むことは、一定の解釈を共有することではなく、例えば徳正に見られる亀裂や複層的な感情のひだにふれることであり、また戦争（沖縄戦）を語る小説テキストに向き合いながら、読み手の画一化されがちな言葉に具体性を与える機会であった。

4. おわりに

岡真理は映画『プライベート・ライアン』（スティーヴン・スピルバーグ監督、1998年）の冒頭の戦闘場面を批判的にとらえている（注¹⁰）。ノルマンディー上陸の戦闘場面が「リアル」に描写されたシーンは確かに見ごたえがある。だがそれは瞬間的な痛みを観る側に与えるだけで、一種のアトラクションとして流通しているように思える。

実際教室で観賞した際には、映画的な描写ゆえに、誰の視点からこの場面に遭遇しているのかが不明瞭であることをポイントとして挙げる生徒もいた。誰にとつての「リアル」か分からない、「見たことがありそうな」映像を、自らの体験として位置づけてしまうことで理解した気になってしまう。アトラクションとして消費されるのではなく、痕跡として残存するテキストに出会うこと。「水滴」を読む試みは、登場人物を私と他者の間に様式的に了解することを目的とするものではなかった。

あるいは死者の世界を「ある／ない」という二分法で裁断することは小説テキストを「読む」際に重要ではない。思いもよらない出来事との対面による読み手への痕跡を発見していくことこそが教室で「水滴」を読むことであった。それは空洞化した「戦争反対」や「世界平和」という言葉に内実を与える機会となるかもしれない。

本授業では「記憶」の問題に焦点を置き指摘してきたが、ウシや清裕、村落共同体のにぎやかさなどに注目し発表した個人、グループもあった。自らの立つ〈ここ・中心〉という特権性に気がつくこと、他者が自らの枠内で了解し得ない存在であること、多くの気付きを与えるテキストとして「水滴」は読まれた。

注

- 1 授業では単行本『水滴』（文藝春秋、1997.9）所収の「水滴」を用いた。本論での頁数はこれによる。
- 2 『文藝春秋』（1997.9 特別号）
- 3 幸田国広「『五十年の哀れ』と向き合う——『水滴』（目取真俊）教材化の試み」（『日本文学』1999.2）
- 4 山中正樹「近代日本文学研究上の課題と第三項論の意義に関する私論——その序説」（『日本語日本文学』2015.3）
- 5 田中実「読むことのモラルティ」（『神奈川大学評論』2006.11）
- 6 アルファベット表記は生徒のイニシャルを示す。
- 7 嶋津与志は「六・二三＝将軍自害＝沖縄戦の悲劇という定式化によって、さまざまな沖縄戦の実相がかき消されてしまうこと」への危惧を指摘する（『沖縄戦を考える』ひるぎ社、1983.5）。
- 8 授業では村上陽子（「循環する水——目取真俊「水滴」論」（『日本近代文学』2009.5）の指摘を参考にした。
- 9 新城郁夫「『水滴』論」（『沖縄文学という企て——葛藤する言語・身体・記憶』インパクト出版会、2003.10）
- 10 岡真理『記憶／物語』（岩波書店、2000.2）